

住民やっとな静かな夜

「ドリフト族」摘発

車体後部を横滑りさせながら、高速でカーブを走る「ドリフト族」が、県警に摘発された。単独で集まるケースが多く、道交法の共同危険行為を認定するのが難しいとされるドリフト族。同行為を適用しての容疑者逮捕の決め手は「集団暴走する実態」をとらえた映像だった。現場は本来の静かな夜に戻ったようだが、県警は「他人の迷惑を顧みない暴走は許さない」として、今後も取り締まりに力を入れる方針だ。



現場は、埼玉スタジアム2002（さいたま市緑区）へのアクセス道路として、2001年3月に開通した市道・南北線（浦和美園駅 スタジアム）。開通以来、ドリフト族の車が立てる騒音に付近の住民は、頭を痛めてきた。

今年8月、現場に設置された進入防止のガードパイプ。路面にはドリフト族のスリップ痕が残っている（さいたま市緑区下野田で）

不眠症になったという農業男性（75）は「真夏でも雨戸を全部閉め、障子の内側にクギを打って毛布を張り防音対策をした。睡眠薬を飲むこともあった」と、これまでの苦悩を打ち明ける。

現場の約2・5キロ区間には信号がなく、夜間の交通量も少ない。ドリフト族は週末、県内外から20～60台が集まり、午前0～4時ごろまで暴走を繰り返した。

県警によると、ドリフト族は、グループを持たず単独で集まるため、集団で行動する暴走族の取り締まりを主目的とした共同危険行為の認定が難しい。

県警幹部は「パトカーが現場に着くと、若者は逃げるため、走行実態の証拠をつかめなかった」という。県警は、現場前で建設中のマンション4階に捜査員を張り込ませた上、ビデオ装置を設置、走行実態を撮影した。同幹部は「映像が動かぬ証拠となった」と話す。

浦和東署と県警交通指導課は、これまでに19～25歳の少年や会社員ら6人を道交法違反容疑で逮捕。捕まった1人は「自分の走行技術を見物客に見せたかった」と動機を供述した。埼玉スタジアム周辺での騒音苦情の110番通報は、今年1月から8月までに多い月で約30件あったが、ここ2か月はほぼゼロ。ただ、ある捜査員は「逮捕されていないドリフト族が場所を変えて暴走を再開する恐れはある」と話し、警戒を強めている。

（2006年10月22日 読売新聞）